

ロラン夫人獄中記の再読 フランス革命の証言として¹⁾

中 里 まき子

問題提起

20世紀半ば以降を「証言の時代」と捉えることができるだろう。それは、特に世界大戦期の諸事件の当事者たちが、多様な「証言」を残したためである。21世紀に入ってからも、収容所で落命したユダヤ系フランス人エレーヌ・ペールの日記²⁾のような当事者のテキストが刊行されたり、映画『ショアー』(1985年公開)の証言者ヤン・カルスキに関するヤニック・エネルの小説³⁾が注目を集めたりと、20世紀の歴史をめぐる証言についてはさらなる探求の余地がある。一方、世界大戦期以前にも、数は少ないものの、「証言」という観点から再発見すべきテキストが残された。こうした様々な証言を広い視野から読んでいけば、そこに人間のメンタリティの推移や、時空を超えた普遍性を読み取ることができるだろう。

本稿では、「証言の時代」以前のものも含めて、証言を広い視野から考察する試みの端緒として、ロラン夫人獄中記に焦点を当てる。ロラン夫人は、政治犯として捕らえられた後、ギロチンにかけられるまで、獄中で自伝を書いたことで知られるが、実際にはフランス革命の証言も書き残している。以下では、ロラン夫人の生涯を概観し、彼女の手記の19世紀における受容の特徴を指摘した後、それを革命期の「証言」として読み直し、証言者としての彼女の姿を浮かび上がらせたい。

ロラン夫人の生涯

ミシュレによって「ジロンドの女王」と呼ばれることになるロラン夫人は、ジロンド県の生まれではない。後のロラン夫人、マリー＝ジャンヌ・フリボンは、1754年3月17日、パリのプチ・ブルジョワ家庭に生まれる。父は彫版師。1765年3月から一年間、初聖体拝領の準備のため修道院で過ごす。しかしその後、1772年頃にカトリック信仰に対して疑問を持ち始め、その疑問は、デイドロ、ダランベールなどのフィロゾフの著作を読むことによって深まり、1775年に彼女は不信仰者になったとされる。またこの1775年に母の病気が急速に悪化し、6月7日に

1) 本稿は、2018年度日本フランス語フランス文学会東北支部大会でのシンポジウム「証言の時代とそれ以前」の枠内で行った発表を、引用文や写真を追加しつつ、発展させたものである。

2) Hélène Berr, *Journal*, Tallandier, 2008.

3) Yannick Haenel, *Jan Karski*, Gallimard, 2011.

死去すると、マリー＝ジャンヌは痙攣を起こして倒れ、二週間生死の境をさまよう。それに続く回復期に彼女はルソーの著作に触れ、決定的な影響を受けることになる。数ヶ月後の1776年1月、ピカルディ地方の手工業監督官ジャン＝マリー・ロラン・ド・ラ・プラティエールと出会い、1780年2月に二人は結婚、翌1781年2月、アミアンに居を構える。同年10月、娘のマリー＝テレーズ＝ウードラが誕生する。

革命が勃発した1789年からロラン夫妻は第三身分による闘争を支持し、1791年2月にパリへ移ると、ロラン夫人のサロンには、ブリソ、ペティオン、ビュゾー、ロベスピエールなど、ジャコバン派の議員やジャーナリストが集う。やがて1792年3月にジロンド派内閣が成立すると、ロランは内務大臣に任命される。当時、この内閣にとっての懸案のひとつに、聖職者民事基本法に従わない聖職者たちの処遇の問題があった。6月10日、拒否僧を国外追放する法令への裁可を渋るルイ16世に、ロランの主導で裁可を促す要請文が送られたとされるが、この要請文を書いたのはロラン夫人であった。

その直後、革命自体、そしてロラン夫妻の状況も潮目が変わってくる。1792年8月10日にテュイルリー宮殿の襲撃、9月上旬に九月虐殺があり、同様の虐殺がオルレアンなどでも起きたことを知ったロラン夫人は、9月9日、当初は熱狂していた革命に対し失望したことを友人に書き送る。同月21日には、ジロンド派とモンターニュ派の合意により君主制の廃止が可決されるが、続いて、特にルイ16世処刑問題で両派の抗争が激化し、ジロンド派が劣勢となる（その後、1793年6月2日に国民公会から追放される）。

1793年1月21日にルイ16世が処刑され、翌22日にロランは大臣の辞職届けを国民公会に提出する。こうして政治の世界から身を引いても、ロラン夫妻はモンターニュ派から告発され続ける。やがて同年6月1日の早朝、ロラン夫人は逮捕され、政治犯としてアベイ監獄に収監される（不在であった夫のロランは逮捕を免れる）。続いて6月24日に彼女はサント・ペラジー監獄に移される。10月31日にジロンド派議員たちが処刑された後、ロラン夫人はコンシエルジュリー監獄に移送され、11月1日、2日の裁判を経て、11月8日、死刑を宣告されギロチンにかけられる。

こうして生涯を閉じたロラン夫人の名が歴史に刻まれ、その記憶が豊かに継承されてきたのは、彼女が約半年の獄中生活の間に手記を執筆し続けたからである。

ロラン夫人獄中記の構成を概観すると、まず、彼女が逮捕直後から書き始めた「革命史覚書」がある。これは、内務大臣ロランの妻という立場ゆえに知りえた、革命期の出来事や人間模様の記録である。政治犯である囚人がこのような文章を書くことは許されないため、ロラン夫人は、6月1日の逮捕直後から秘密裡に執筆しては面会に来た友人に手渡し、保管を依頼した。現存するのは文庫版で50ページ分程である。この「革命史覚書」の一部は、保管していた人物の逮捕にともない焼却された。8月、このことを知ったロラン夫人は、損失を補うために「肖像と逸話」を書き始める。文庫版で150ページ分程だが、その一部の内容は「革命史覚書」と重複している。またその時、ロラン夫人は「私的回想録」にも着手する。これは自身の生涯を幼年期から回想して書いた自伝で、文庫版で200ページ分程ある。さらに10月8日、ジロンド派の壊滅を知った彼女は、文庫版で10ページ分程の「最後の断想」を執筆する。

ロラン夫人獄中記については革命期の1795年から多数の版が刊行されていて、版によって収録されるテキストや提示される順序が異なるが、概して上記のような内容となっている。版によっては、「私的回想録」以外のテキスト全体を「革命史覚書」として一括りにすることもある。

19世紀におけるロラン夫人獄中記の受容

このロラン夫人の手記は、19世紀に、シャトーブリアン、スタンダール、ゲーテらによって賞賛された。彼女はフランス共和国のシンボリック的存在であったようで、ラマルチヌ『ジロンド党史』（1847）やミシュレ『フランス革命史』（1847～1853）においてその生涯が描かれたばかりか、演劇、絵画、彫塑等の題材にもなった。



Laslett John Pott (1837-1898) 作
 « Oh Liberté ! Que de crimes on commet en ton nom ! » (1874)
 フランス革命博物館 (Vizille) 蔵



Vital Cornu (1851-1927) 作
 « Madame Roland (1754-1793) » (1899)
 フランス革命博物館 (Vizille) 蔵

こうしたロラン夫人をヒロイン化する動きの中で、彼女について最も多くを語ったのはサント=ブーヴであった。サント=ブーヴのテキストから、当時のロラン夫人像を集約する箇所を紹介したい。

[...] ロラン夫人は、彼女の特徴である理性と熱意、情熱と的確さの調和と、平民だからこそ感じることのできる彼女から発する豊かな心の躍動ゆえに [...], 女性版ジャン=ジャック・ルソーであり、将来にわたってそうあり続けるだろう⁴⁾。

このようにロラン夫人をルソーの後継者とする見方は、文学者たちによって広く共有されていた。実際、次の引用箇所が示すように、彼女はルソーの熱烈な愛読者であった。1775年、21歳のときに母を病気で失った際、痙攣を起こして倒れた彼女は、その後の回復期にルソーの著作『新エロイズ』を知る。その時の感激を、回想録において次のように述べている。

彼 [ルグラン神父] は私が本を読んでもいい状態になったと判断すると、ジャン=ジャックの『新エロイズ』を持ってきてくださって、その読書は私にとって本当に最初の楽しみとなった。私は21歳だった。私はすでにたくさんの本を読んでいた。私は多くの作家、歴史家、文学者、哲学者を知っていた。でもその時ルソーは、8歳の時にプルタルコスから受けた印象と同様の印象を私に与えた。ルソーは私のための精神の糧であり、私が以前

4) Sainte-Beuve, « Madame Roland » [1864], *Nouveaux Lundis*, tome 8, Michel Lévy frères, Librairies éditeurs, 1867, p. 264.

から知っていたけれど説明できずにいた感情の唯一の解釈者であるように思われた⁵⁾。

ロラン夫人はルソーの愛読者であったばかりか、彼女の自伝である「私的回想録」は、ルソーの自伝『告白』の多大な影響のもとに書かれた。そのことを彼女自身が示唆している箇所を引用したい。10歳頃に、彫版師であった父の弟子のひとりから性的暴行を受けかけた経験をこの回想録で明かした後、次のように述べている。

この経験から非常に強い印象を受けたため、啓蒙と理性の時代にあっても、それを思い起こすには苦しみを伴った。私が完全に信頼している親密な友人にも話すことはなかったし、ほとんど隠し事などしたことのない夫にも黙っていた。この瞬間、それをここに書き記すためには、ルソーが盗んだりボンの話を書いた時と同じくらいの努力を必要とした。その経験は私のものとは比較にならないけれど⁶⁾。

ロラン夫人は、誰にも語ることのなかった幼年期のトラウマ的出来事を回想録において明かし、その状況を、ルソーが『告白』において過去の過ち——奉公先でリボンを盗み、ある少女にその罪を着せたこと——を遂に白状した状況と重ねている。彼女が獄中で自伝を書いたのは、良い面も悪い面も等しく、自己のすべてを曝け出し、そのことを通して、不当に迫害され、排斥された夫ロランと自分の正当性を後世の人々に訴えるためであった。このように赤裸々な自伝を通して自己弁護することは、ルソーが『告白』において試みたことである。

ロラン夫人にルソーの影響を読み取る見方は、ベアトリス・ディディエ『フランス革命の文学』においても示されている。ディディエは、フランス革命期の10年間は「とりわけ個人的な著述の豊富な時代」であるとし、そこにルソーの自伝『告白』の「決定的な影響」を指摘する⁷⁾。そしてディディエは革命期の個人的著述の典型としてロラン夫人の手記を挙げている。その際、獄中記のうち「革命史覚書」等は捨象して、幼年期からの「私的回想録」がスタンダールら作家たちの心を掴んだという側面を強調する。

ロラン夫人の『回想録』はロマン派たちの感嘆を呼び起こした […]。スタンダールは『アンリ・ブリュラーの生涯』を贈る女性を思い描くとき、彼女のことを想っていた。それは確かに、彼のフランス革命への共感からでもあるが、おそらくはまた、彼がこの女性に、偉大な自伝作家を見ていたからでもあるだろう。この『回想録』の記録的価値は極めて重要である。そして『私的回想録』は、思い出すという能力が生命そのものとともに消えようとする瞬間に、幼年期と青年期を辿り直すことによって、失われた過去の全体を蘇らせようとするものである⁸⁾。

19世紀の読者たちは、ロラン夫人をルソーの影響下にある自伝作家と捉えて、その手記に「自己」のエクリチュールを見出した。そのため革命期という時代の証言である「革命史覚書」

5) Madame Roland, *Mémoires de Madame Roland*, édition publiée avec des notes par C. A. Dauban. Henri Plon, Imprimeur-Éditeur, 1864, p. 132-133. [Elibron Classics Replicaの複写版を参照]

6) *Ibid.*, p. 27.

7) Béatrice Didier, *La Littérature de la Révolution française*, Presses universitaires de France, « Que sais-je ? », 1988, p. 108.

8) *Ibid.*, p. 115.

にはそれほど注目しなかった。ところで、このようなロラン夫人獄中記の受容は、19世紀の時代精神を強く反映するものと言えるだろう。もし20世紀半ば以降の読者、すなわち「証言の時代」の読者が読み直せば、19世紀の読者とは違った側面に着目するということが大いにありえるだろう。

実際、時代によってテキストの受容に変化があったようで、そのことは、ロラン夫人獄中記の編纂の仕方に映し出されている。恐怖政治が去った1795年のポスク版を皮切りに、19世紀を通してロラン夫人獄中記の複数の版が刊行されたが、それらは「私的回想録」（自伝）が先で「革命史覚書」等が後という順序で編纂された。これは執筆の順序とは異なる。ロラン夫人は逮捕直後に「革命史覚書」を書き始め、その後、友人に託した手記の一部が消失したことを知り、それを契機として「肖像と逸話」と自伝である「私的回想録」を書いたのである。ところが、19世紀に刊行された版だと、彼女が「私的回想録」から書き始めたような印象を与えてしまう。そして1905年のクロード・ペルー版になると、獄中記のうち「革命史覚書」等は省かれ、「私的回想録」のみが、ロラン夫人の手紙などと併せて編纂されている⁹⁾。

その後、1929年にもユイスマンの手によって「私的回想録」のみの版が刊行された後、30年以上を経て1966年にポール・ド・ルーによってロラン夫人獄中記が刊行されたとき、「革命史覚書」が先で「私的回想録」が後という順序で編纂された。このように「革命史覚書」から提示するというのは、管見の限りでは初めてのことである。19世紀の編者が「私的回想録」を重視し、1905年のペルー版と1929年のユイスマン版では「革命史覚書」が切り捨てられたことを考えると、このポール・ド・ルー版の編纂の仕方に、人々のメンタリティの変化を読み取ることができそうである。20世紀半ばには、獄中で綴られたロラン夫人の言葉をできるだけありのままに受け取ること、そのために、書き手が執筆した順序に近い形でテキストを読むことが重視されたと考えられる。

ロラン夫人獄中記の再読

そして今、改めてロラン夫人獄中記の全体を読んだ場合に浮かび上がってくるのは、自伝作家としてのロラン夫人のみならず、年代記作家としての彼女の姿である。あまり着目されてこなかったものの、ロラン夫人は『イングランド史』を書いたトーマス・マコーリーや古代ローマの歴史家タキトゥスのように年代記を書きたいと思っていた。

もし私に生きる機会が与えられたなら、ひとつの欲求しか持たないだろう。それはこの時代の「年代記」を書くこと。私の国のマコーリーになること。フランスのタキトゥスと言ってもいいだろう [...]。私はこの監獄で、本当にタキトゥスに熱中している。彼の本の一部を読まずに寝ることはできない。私たちは同じように物事を見ているようだ。この時代、やはり豊かな主題について、私が彼に倣って表現することも不可能ではなかっただろう¹⁰⁾。

続いて、年代記作家としてのロラン夫人の姿を浮き彫りにするために、革命期の重要な出来

9) ベアトリス・ディディエはクロード・ペルー版を「最初の良版」とみなしている。Ibid., p. 115.

10) Madame Roland, *op. cit.*, p. 181.

事である九月虐殺が、彼女の「革命史覚書」においてどのように伝えられているかをみてみたい。彼女はまず、監獄に収監された多数の貴族や聖職者が犠牲となった虐殺事件の背景として、恐怖に囚われた大衆の心理を挙げている。1792年8月20日からフランス軍とプロイセン軍との戦闘があり、9月1日にヴェルダンが陥落したという噂がパリに届けられる。すると人々はパリが敵軍に占領されることを妄想する。

ヴェルダン陥落の噂は、衝撃と恐怖を伴って9月1日に拡散された。各党派の常連たちは、敵軍がシャロンに向かっていると言っていた。彼らによれば、パリ到着まであと三日しかないようだった。人々は、遠くから情報を得ているだけで、食料、荷物、大砲を持った軍隊の進行が要する日数を計算できず、軍隊の歩調と個人の歩調が大きく異なることがわからないため、すでに荒らされて煙を出している首都にいる外国の軍隊を想像していた¹¹⁾。

この時、パリ自治政府が市民たちに向かって、翌日の9月2日にシャン・ド・マルスに集結し、祖国防衛のために出征することを呼びかける。するとこの呼びかけが民衆たちの妄想をさらに加速させる。彼らは、祖国防衛のためにパリの男たちが出征すれば、囚人となっている大勢の貴族たちが監獄を抜け出し、男たちが不在となった家庭に襲いかかると考えたのである。その模様をロラン夫人は次のように伝えている。

人々は、監獄にいる大勢の貴族たち（あるいは金持ちたち）が企んでいる陰謀と、家庭を離れることに対する市民たちの心配と嫌悪について話している。市民たちが家庭を離れば、監獄にいる貪欲な狼たちがすぐに脱獄し、家庭に残された最も大切なものに襲いかかるからである¹²⁾。

このようにロラン夫人は、フランス軍の敗戦によって恐怖心を掻き立てられた人々が、その捌け口を、投獄されている貴族たちに見出したという九月虐殺の背景を描き出している。

ところで、彼女が1793年6月にこの「革命史覚書」の文章を書いているアベイ監獄は、前年の9月に、まさしく九月虐殺が起きた現場である。そのため彼女は、事件の現場に来て初めて知り得た詳細な情報を書き加えている。

私は、上記の監獄の一番目〔アベイ監獄〕に滞在しているため、背筋が寒くなるような詳細を知ることができた。私にはそれを書き記す勇気がない。でもこの逸話に言及しないわけにはいかない。なぜならこの逸話は、虐殺がよく練られた計画であったことを立証するからである。サンジェルマン街に留置所があり、そこにはアベイ監獄が満員で収容しきれない囚人が収監されていた。この囚人たちを移送するのに、警察は日曜日の夜、つまり大虐殺に先立つ時間帯を選んだ。殺人者たちは用意ができていた。彼らは馬車に襲いかかった。5、6台の囚人馬車であった。刀と槍で、殺人者たちは馬車に乗っていた人々を突き刺して殺した。通りの真ん中で、苦しむ囚人たちのおぞましい叫びを響かせながら。[...]パリ全体がなすに任せていた…… 私には、パリ全体が呪われて見えた。そして私は、人

11) *Ibid.*, p. 261-262.

12) *Ibid.*, p. 262.

類や自然に対する最悪の背反にも無関心でいられる卑劣漢たちに自由がもたらされることをもはや望まなかった。50人の武装した男の力で容易に防ぐことができたであろう暴行の非情な見物人たち¹³⁾。

この九月虐殺の記述は、囚われの身となつてなお、年代記作家として情報収集を続け、革命の現実を書き綴ろうとするロラン夫人の姿を浮かび上がらせる。

また、時代の証言を残すことに対する彼女の思い入れを伝えるのは、こうした記述のみではない。年代記作家の視点から革命を見ている彼女は、やがて訪れる自分自身の処刑もまた革命史の一場面を構成することを予期している。しかし、自らの死を自分で証言することはできないため、ロラン夫人はある友人に、この出来事の証言者となることを前もって依頼する。10月31日にジロンド派の同志たちが処刑された後、彼女は面会に来たソフィ・グランシャンに次のように言う。

あなたは私の最期を見に来ることはできるでしょうか。それがどうであったか、真実の証言をするために¹⁴⁾。

この願いを聞き入れたソフィ・グランシャンに対し、ロラン夫人はより詳細な指示を与える。ロラン夫人の死から13年後に書かれた回想録において、ソフィ・グランシャンはその時の二人の会話を伝えている。

「私が移送されるのを見るとだけ約束してください。あなたがいてくれたら、この忌まわしい道のりが私に引き起こす恐怖を弱めてくれるでしょう。少なくとも私は、私にふさわしい人物が、これほど恐ろしい試練においても私が保ち続ける精神の揺るぎなさを賞賛してくれると確信することができます。あなたには歓んでもらえるでしょう。私はあなたを悲しませることはしません。」

「その通りにします。私はどこにいればいいでしょう。」

「ボン・ヌフの端、一段目の近くで欄干に寄りかかって、今日と同じ服装で¹⁵⁾。」

1793年11月8日、ソフィ・グランシャンは約束通り、ボン・ヌフのロラン夫人が指定した場所へ赴き、断頭台の据えられた革命広場（現コンコルド広場）へと移送される彼女の姿を目撃する。そしてその様子を回想録において次のように描写する。

私は遠くから運命の馬車を見つけた。その瞬間、勇気と気力が蘇った。私の任務と、私をもたらす結果に専心して、視界に入る空間の中で私を引きつける唯一の対象しか見なかった。緩やかな足取りが私の心痛を和らげた。友人の姿を見つけると、私は彼女から目を離さなかった。彼女は清々しく、穏やかに、笑みを浮かべていた。一緒にいる死刑囚に言葉をかけて勇気づけようとしているのが見えた。この哀れな男の青白さと落胆した表情は、

13) *Ibid.*, p. 269.

14) Sophie Grandchamp, « Souvenir de Sophie Grandchamp », dans Madame Roland, *Mémoires de Madame Roland*, publiés par Claude Perroud, Librairie Plon, 1905, p. 492.

15) *Ibid.*, p. 492.

隣の女性の自信に満ちた身のこなしや顔色の輝きと際立って対照的であった。橋に近づくと、彼女の眼差しは私を探していた。この最後の忘れがたい待ち合わせ場所に私を見つけて彼女が感じた歓びを、その眼差しに読み取ることができた。私の正面に来ると、笑みを伴った瞳の動きによって、彼女は、望んでいたものを得られて満足していることを私に伝えた。しばらく私はそこに立っていた。しかし、彼女が遠ざかって互いに見えなくなるとすぐに、精根尽き果てて錯乱状態に陥った。自分がどうなってしまったか、どうやって帰宅したかわからなかった¹⁶⁾。

ロラン夫人の最期は、ミシュレの『フランス革命史』などでも印象的な場面となっている。このソフィ・グランシャンの証言がなければ、その後のロラン夫人像は大きく異なるものになっていた可能性もある。

結びにかえて

自らについて語ることと時代について語ることは重なる部分もあるため、完全に分離できるわけではない。それでも、19世紀の読者たちがロラン夫人を自伝作家と捉えて、時代の証言者としての側面にはあまり注目しなかったことを確認できた。だからこそ、「証言の時代」に、彼女の手記をフランス革命の証言として捉え直すこと、さらに、別の時代の証言と比較するような試みには意義があるように思われる。

また、ロラン夫人の手記が現在まで人々の期待に沿って編纂され、読まれてきたことは、過去のテキストに向き合う私たちに重要な示唆を与えている。客観的で中立な立場からの読解を目指しても、時代精神に制約された解釈から完全に逃れることはできないのだろう¹⁷⁾。

16) *Ibid.*, p. 495-496.

17) 本稿は、日本学術振興会・2019年度科学研究費助成事業（基盤研究C）「コンピエーニュ・カルメル会殉教修道女の表象に関する研究」（課題番号17K02582 研究代表者・中里まき子）の研究成果の一部である。